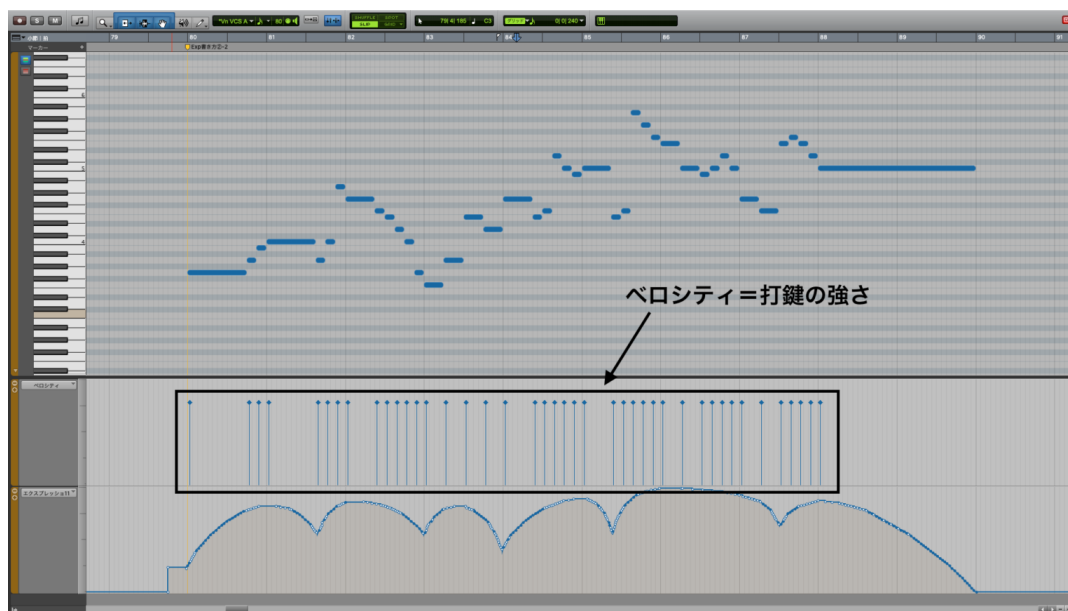


3-2 スtringスのベロシティ

① ベロシティ

ノート(音)の強さのこと。(正確には「打鍵の速さ=強さ」)。ノート1音ごとに値が割り振られているため、コードなど複数音同時に演奏した際にも、個々の音に強弱をつけることができる。ピアノやドラムなどの打ち込みで欠かすことのできないパラメータ。

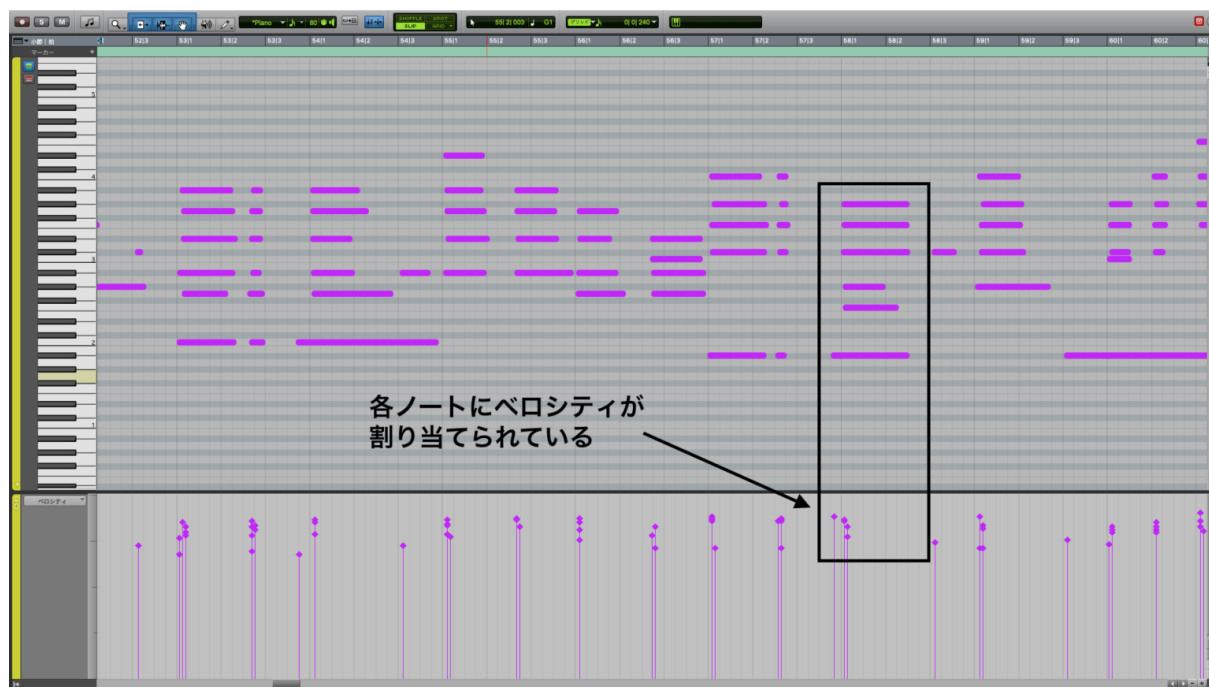


ベロシティの特徴

- ① ノート1つ1つに強弱を設定可能
- ② 打鍵のタイミングで決定し、その後は変更不可
- ③ ベロシティによって音色も変化する

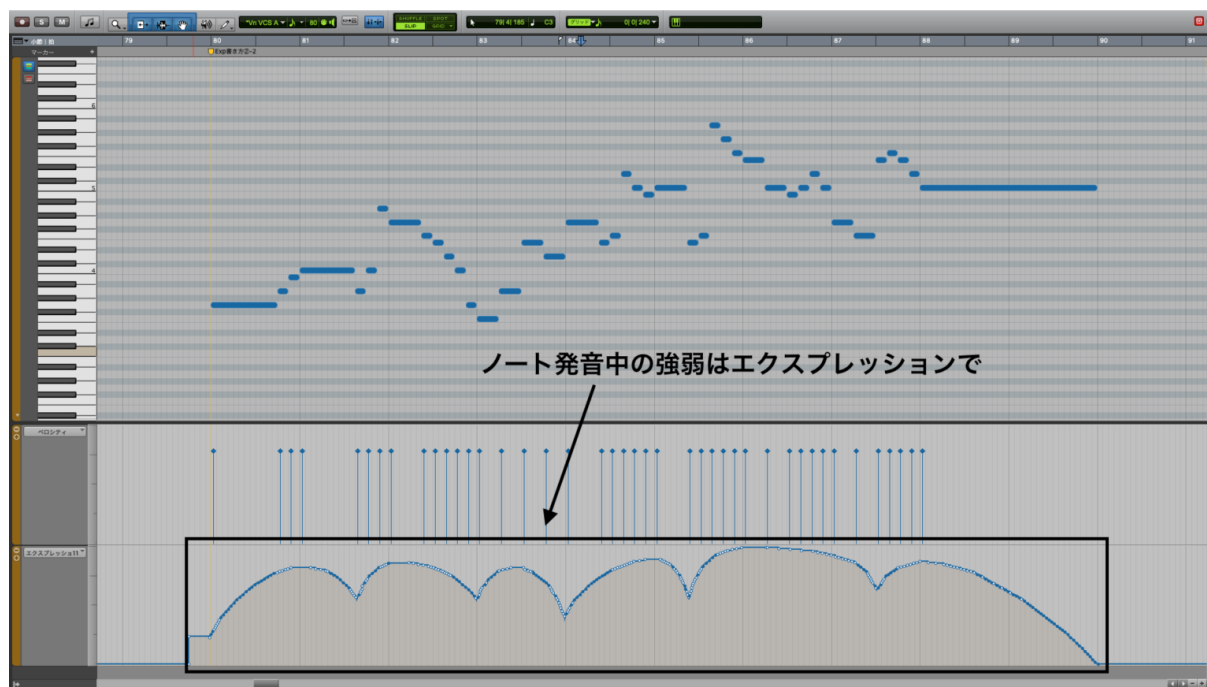
① ノート1つ1つに強弱を設定可能

ベロシティはノート1つにつき1つの値を設定可能。そのため、コード楽器やドラムなど、複数の音を同時に鳴らすことの多いパートでも、1音ごとに強弱を設定することができる。



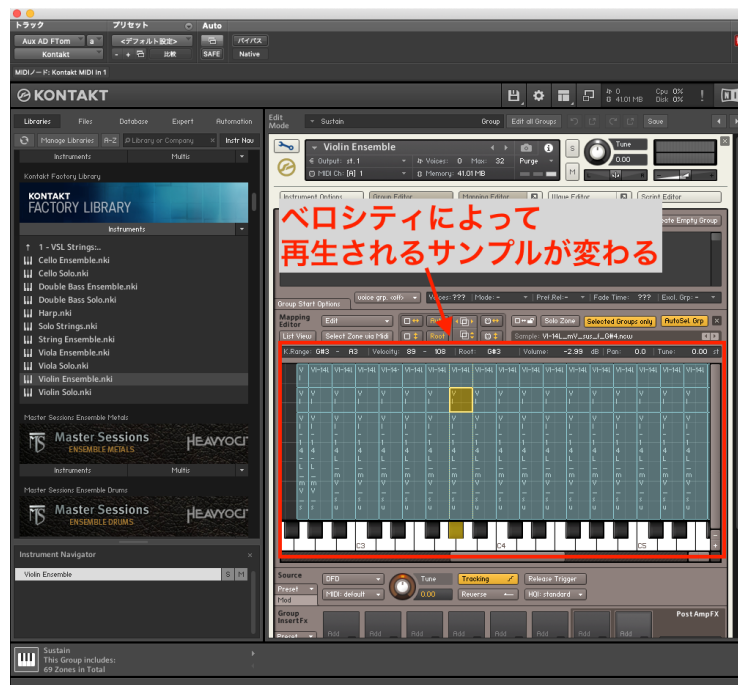
② 打鍵のタイミングで決定し、その後は変更不可

ベロシティの値は打鍵のタイミングで決定するため、一度値が決まってしまうとその後は変更できない。したがって、ノートの再生中に音量を変更したい場合は、エクスプレッションを用いて音量をコントロールしよう。



③ ベロシティによって音色も変化する

多くの音源は、よりリアルな演奏感を実現するために、ベロシティ値によって異なるサンプルが再生されるようプログラムされている。(=ベロシティレイヤー)これにより、実際の強弱にマッチしたサウンドが自動的に演奏される。



ストリングスの ベロシティ設定方法

ストリングスのベロシティ設定方法

① ロングノート系はベロシティ一定

- 理由①: ノートごとに音量が変わると、エクスプレッションが意図通りに効かない
- 理由②: レガートで演奏する場合、そもそもベロシティという概念が存在しない

② ショートノート系は必要に応じてベロシティを調整

① ロングノート系はベロシティー一定

【理由①】ノートごとに音量が変わると、エクスプレッションが意図通りに効かない
レガートでの演奏時は、個々のノートの強弱よりもフレーズの抑揚(=エクスプレッション)が重要。しかし、すでにベロシティーによる強弱がついてしまっていると、エクスプレッションで指定した抑揚が意図通りに反映されなくなる。したがって、ベロシティーは一定にした上で、音の強弱はエクスプレッションに委ねるのが得策。

【マメ知識: ロングトーン的重要性】

弦楽器や管楽器における最も基本的なトレーニングは、ロングトーンの習得。まっすぐブレずに音を出し続けることが基本中の基本となっている。なぜなら、音をぶれずに演奏できて初めて、自在に強弱をコントロールすることができるようになるため。

打ち込みにおいても全く同じで、まずは一定のベロシティーでまっすぐ演奏できる状態を作った上で、エクスプレッションで自由に強弱をつけた方がより自然な演奏になる。

① ロングノート系はベロシティー一定

【理由②】レガートで演奏する場合、そもそもベロシティーという概念が存在しない

ストリングスでは、レガートで演奏をする場合、原則としてひと弓で(=弓を返さずに)演奏する。つまり、音が切り替わるタイミングで行われる動作は指板を抑える指の変更のみであり、新たに音を弾き直すわけではない。

つまり ベロシティーが発生するような動作は一切行われないため、当然ベロシティー自体が存在しないということになる。

そのような意味でも、ベロシティーは一定にしておく方が自然な演奏に仕上がる。

【参考】ストリングスの主な奏法① – Long Note編 –

1)レガート・スラー



フレーズ内を切れ目なく演奏する。

原則、スラーで括られたフレーズはひと弓で演奏しなければならないため、必要以上に長いスラーを使うことは不可能。

現実的に演奏可能なフレージングを考慮して適度に分割することが望ましい。

2)ポルタメント



指定した2音間の音程を滑らかにつなげて演奏するテクニック。

基本的に同一弦上での跳躍進行の際に用いることができる。(或は演奏の際に必然的に起こることもある。)

非常に甘美なサウンドが得られるが、多用は禁物。

3)トレモロ



弦にあてがった弓を小刻みに動かして演奏するテクニック。

通常のランダムなトレモロの他に、特定の音価を指定することも可能。

緊迫感のある独特のサウンドが得られるが、特に低音楽器のそれはゴソゴソとした摩擦音を多く含み迫力がある。

4)トリル



他の楽器同様、指定した音程と短2度または長2度上の音程を交互に素早く演奏するテクニック

基本的な考え方は他の楽器と同様だが、ストリングスの場合は複数人で演奏するため、結果的に2つの音が同時に響いているようなサウンドになることを考慮しておきたい。

② ショートノート系は必要に応じてベロシティを調整

スタッカートやピチカートといったショートノート系の音色ならば、ベロシティを変更してもOK。これらの音色は全て「減衰系」の音色であるため、ノートの発音中に音量を変更する必要がないからである。

また、レガートやスラーのように複数の音をつなげて演奏することもなく、1音1音弾き直すことから、ショートノート系音色の強弱の変更はベロシティで行う方が自然に仕上がる。

【参考】ストリングスの主な奏法② – Short Note編 –

1) スピッカート



弦と弓の弾力を利用して、弓を自然の力で弾ませながら演奏するスタッカート。

ある程度細かいパッセージも演奏可能。

弓で弦を叩くようにして演奏する「saltando」と呼ばれるテクニックもあり、状況に応じて使い分けると良い。

2) マルカート



ひとつひとつの音をはっきりと演奏する奏法。

記号で表記する場合もあるが、「marcato」または「marc.」と表記することも多い。

3) ピチカート



弓を用いず、指で弦をはじくテクニック。

高音楽器ではあまり余韻がなく、スタッカート程度の音価しか実現できないが、低音楽器の場合（特に解放弦）は余韻が長いため、全音譜程度までなら演奏可能。

弓の持ち替えに時間がかかることを考慮すべし。

4) バルトークピチカート



弦を親指と人差し指ではさみ、激しく指板に弾きつけるテクニック。

「ビシッ」という激しい音を得られ、特に低音楽器では著しい効果が得られるが、高価な楽器が痛んでしまうため、プレイヤーはあまり演奏したがない点も考慮しておきたい。